# はしがき

中国の武漢から流行がはじまったとされる新型コロナウィルスは、世界中に広がりパンデミックとなった。不要不急の外出を控えろという要請のもと、自宅に引きこもりながら本書の原稿を書き進めている。

新たな感染症が流行した背景として、感染がはじまった時期が、中国の春節(伝統的な暦に基づく正月)の直前であったことが挙げられている。人が国内で大移動し、世界各地に多くの観光客を送り出していた。中国の人口の多さと、今回のパンデミックとが関連づけて語られることが多い。

「中国」という言葉を耳にしたとき、大半の人が思い浮かべる中華人民共和国は、一九八〇年代から急成長を遂げ、国内総生産ＧＤＰはアメリカに次いで二位となり、一帯一路政策を推し進めることで世界における存在感を高める国、そしてネットを介して人民にサービスとともに監視を強めるという統治システムを構築しようとしている、といったものだろうか。今後の世界において、この中国という存在は、看過することはできないだろう。

特に日本列島に住む私たちにとって、好むと好まざるとによらず、隣国であり続ける。かくも巨大な国と付き合っていくためには、政治・経済・軍事などの視点も重要だが、長期的なヴィジョンを描くために必要不可欠な視点が、人口である。

出生数の減少、男女比のアンバランス、労働人口の比率の低下、都市部への人口集中と農村の過疎、超高齢化社会の到来などの問題に、中国が近い将来、直面することが予測されている。このような未来は、人口動向から読み取ることができる。中国人口史を深掘りする作業は、緊急性を要するのである。

巨大な人口を抱えている、こうしたイメージで中国は語られる。しかし、歴史をさかのぼると、人口が急増しはじめたのは一八世紀であった。本書の目的は、現在の中国の人口がどのような道筋を経て形成されてきたのか、そして今日まで続く人口の急増の背景はどのようなものであったのか、歴史的に明らかにするところにある。

しかし、広大な中国の人口史を扱うには、データを収集し、解析するために多大な労力を要する。個人の研究者の力では、とても扱えるテーマではない。また、日本では中国史研究者の養成が、王朝ごとに行われているために、数千年にわたる人口史を通観できる人材が育っていない。各時代の歴史を理解するためには、人口が重要だということが分かっていても、なかなか取り組めないというのが、日本の中国史研究の現状である。

一方、中国では国家的な研究プロジェクトとして、多くの研究者を動員して、大きな予算を配分して、人口史をまとめている。本書は中国人口史の道筋をつけるために、主に中国で刊行された『中国人口史』を批判的に読み解きながら、人口から中国を理解するための視座を提供することを目的とした。

二〇二〇年はまた、中国で一〇年ごとのセンサス(国勢調査)「第七次全国人口普査」が行われる。調査結果が公表される時期は、その翌年以降となる。二〇世紀から現在にいたる現代中国人口史は、最新の統計が発表されるのを待ち、本書ではその前段階となる先史時代から一九世紀までを対象とする。

これまで中国史に触れてきた方も、人口という視点から見ることで、おそらく新たな発見があると思う。本書が広く読まれ、読者から忌憚ない批判や提案を賜るよう、願っている。なお、本書の執筆にあたっては、中国で出版された中国人口史に関する多くの著作を咀嚼して記したため、出典は明記しなかった。さらに興味を覚えて研究の道に進む方は、本書の末尾に添えた参考文献リストを参照していただきたい。

二〇二〇年三月

上田　信

# 目　次

はしがき
序　章　人口史に何を聴くのか……1
第一章　人口史の始まり……19
——先史時代から紀元後二世紀まで
第二章　人口のうねり……59
——二世紀から一四世紀前半まで
第三章　人口統計の転換……103
——一四世紀後半から一八世紀まで
第四章　人口急増の始まり……141
——一八世紀

第五章　人口爆発はなぜ起きたのか……171
——歴史人口学的な視点から
第六章　人口と叛乱……205
——一九世紀
終　章　現代中国人口史のための序章……239
あとがき　247
参考文献リスト

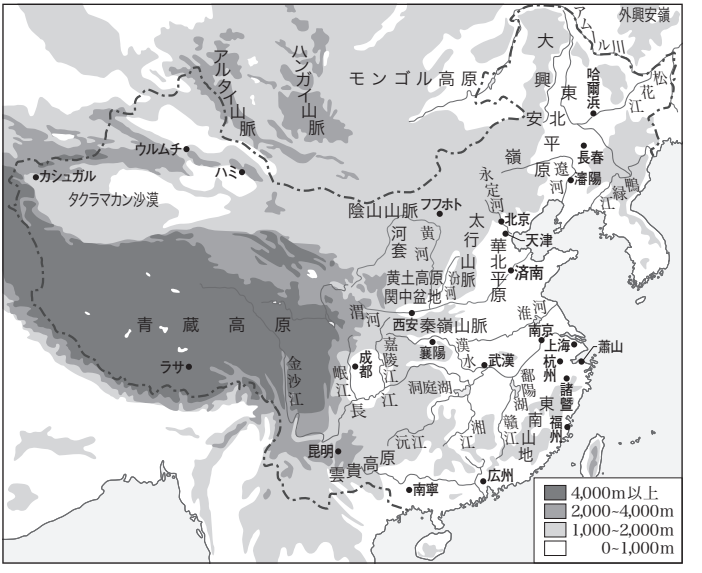



図 0-1　東ユーラシア地勢図

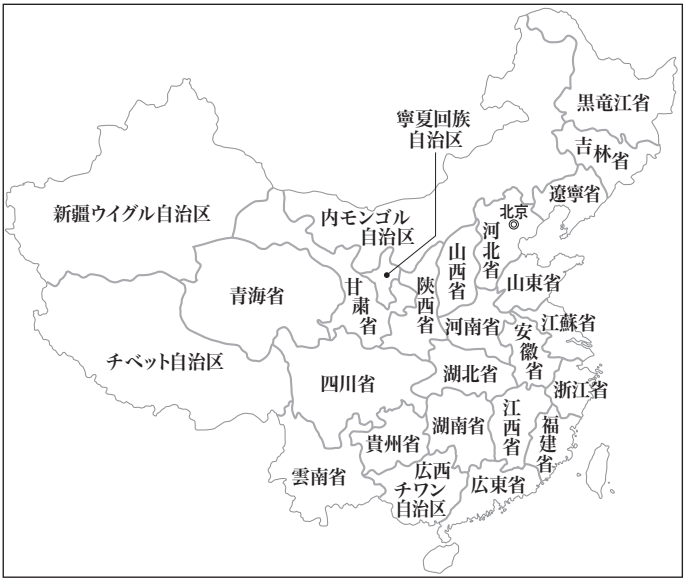



図 0-2　中国分省地図（海南省設置前）

# 序　章　人口史に何を聴くのか

## 人口の原理

一七九八年、匿名の著者による小冊子がロンドンで出版された。タイトルを直訳すると

人口の原理に関するエッセー――それは将来の社会の改善に影響するために、ゴドウィン氏、コンドルセ氏、および他の著述家の憶測にふれながら――

副題の「それ」とは、「人口の原理」を指している。

この小冊子は出版されると話題となり、一八〇三年にデータを補充し、議論を詳細にした第二版が出版されたときに、著者の名が明かされた。その名は、トマス＝ロバート＝マルサス。その後、第六版まで刊行されるが、人口学の扉を開いたのは、一八世紀末に刊行された初版である。

この著作が人口史の古典とされる理由は、シンプルな公準(原文 postulata)とシンプルな命題を提示し、そこから演繹的に社会を論じているところにある。なお公準とは、その他の命題を導き出すための前提として導入される、最も基本的な仮定のことである。

マルサスが提示した公準は、次の二つである。

一、食糧は人間の存在に、欠かすことができない。

二、両性のあいだの情動は必須であり、ほとんど現状のまま存続しつづける。

単純化すると、人間が動物である以上は、食欲と性欲とを欠かすことはできない、ということになる。食糧がなければ個体としてのヒトは生存できないし、性欲がなければ種としてのヒトは絶滅する。

この公準から、有名な「何の抑制もなければ人口は、等比級数的(geometrical)に増加するのに対して、人間の生活物資の増え方は等差級数的(arithmetical)である」という命題が導き出される。直訳すると、人口は「幾何平均的」に増えるのに対し、食糧は「算術平均的」にしか増えないということになる。

マルサスが人口を考察した動機は、次のようなものであった。当時のイングランドでは、貧

困と悪徳が深刻な社会問題として認識されていた。これらの問題に対して、解決の道筋を見出すためには、根本的な原因を明らかにする必要がある。そして、生物としての人間にまでさかのぼって議論を始める必要があると、マルサスは考えたのである。なお、マルサスのいう「悪徳」とは、十戒にも記された「姦淫」、すなわち具体的には、生殖に結びつかない、快楽を目的とする性行為である。当時の社会問題としては、売買春ということになる。

彼が提示する処方箋は、副題に名指しされているゴドウィンの社会主義的な施策、コンドルセの福祉国家的な政策でもなく、またアダム＝スミスの自由主義経済でもない。国内の農業を振興して食糧を増産する一方で、ある程度の貧困層が存在することを容認することで、人口増加を抑制すべきだ、ということになる。

のちに社会主義者からも、福祉を重視する立場からも、また自由貿易主義者からも、マルサスが批判されるのは、貧困を社会政策で救済することを否定したところに起因する。しかし、マルサスが副牧師でもあったところから考えると、貧困ではなく悪徳を、人口論の課題に位置づけていたことは確実である。聖書にもあるように、「貧しい人々は、幸いである」のだから。

政策論ではなく人口の歴史を考察する際には、彼が提示した公準と命題とは、いまも有用であろう。食糧と人口の関係については、生産量だけではなく、季節的変動や食糧流通などのテーマが、浮かび上がってくる。また、出産率と人口の関係については、未婚率・婚姻年齢・出

産間隔・避妊・合計出生率・嬰児殺し・幼児死亡率などの人口学のテーマが、演繹されてくる。

## マルサスの中国論

中国人口史を論じようとする本書の冒頭で、マルサスを取り上げたのには、理由がある。マルサスはイングランドの状況を、しばしば中国と対比しながら、論じているからである。当時、イギリスは中国を統治する清朝と交渉して、自由貿易の門戸を開こうとしていた。中国に関する具体的な情報が、英語の文献となって伝えられていた。その当時の最新の情報に基づいて、彼は中国の状況を記している。

マルサスの中国論を拾い読みしてみよう。

中国は世界でもっとも肥沃な国で、農業が盛んに行われている。

イングランドは家畜の糞で施肥しなければ農業は維持できないが、中国では肥料を与えなくても米の二期作ができる地域もある。イングランドには、そのような土地はない。

中国では、すべての土地がすでに耕作されており、生産量の大幅な増加は見込めない。

中国人のすべての階層で、早婚が一般的である。

中国の法律では、親自身による捨て子を認めている。

老いた両親の扶養は、息子の義務とされている。

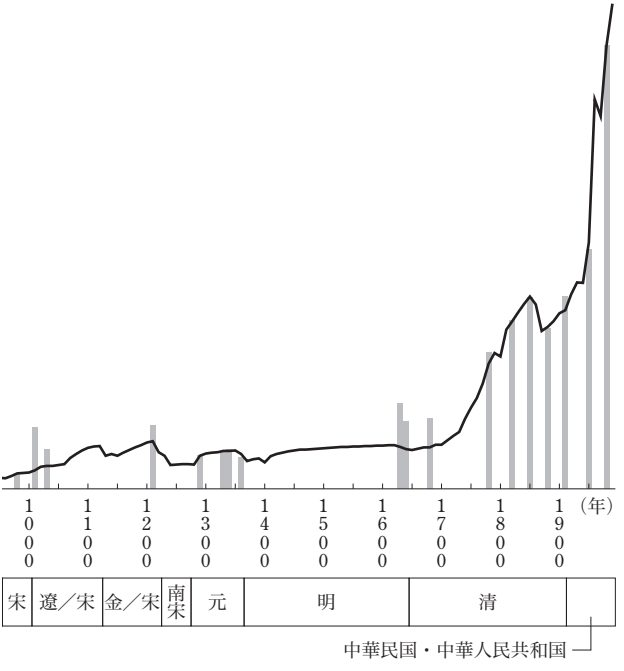
中国では、労働の賃金はきわめて低い。社会の下層では、最小限の食糧で生活することに慣れている。平年の食糧生産量では、貧困層はかつかつの生活しかできず、凶年には飢饉になりやすい。

中国の人口は停滞的である。

中国は、その法律や制度の枠内で、長いあいだ栄えてきた。

マルサスの中国論は、彼なりの理念的な社会として語られている。恵まれた自然環境のもとで土地が限界まで耕作されているために、食糧が劇的に増える可能性はない。それにもかかわらず中国社会が維持され、繁栄を維持している理由は、貧困層が生存できる限界の生活水準に置かれ、さらに老人の扶養義務も負っているために、産み育てる子どもの数を抑制せざるを得ないため、人口は増加しない。

中国のように早婚であれば、売春宿に通うなどの悪徳も減るに違いない。イングランドが持続的な存続を求めるのであれば、中国のように貧困層の存在を認めるべきだ。他の著述家が提案する救貧法や高齢者扶養政策などは、採るべきではない。これがマルサスの見解であると思われる。




趙・謝(1988)推計／棒グラフ＝曹(2001)推計)

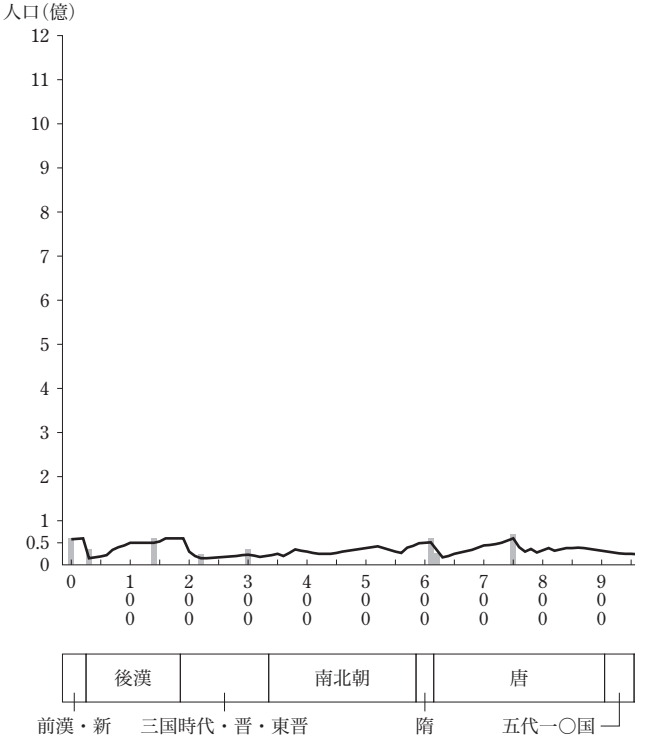



図 P-1　中国人口の趨勢(折れ線グラフ＝

人口論の初版が刊行された一八世紀末、中国の人口は、マルサスの言うように停滞していたのであろうか。

ここに示したグラフ（図P-1）を眺めていただきたい。折れ線グラフは趙・謝『中国人口史』、棒グラフは曹『中国人口史――清時期』に掲げられた数値に基づいて描いたものである。前者は各王朝の統計値に修正を加えて、人口の趨勢を示す。後者は、各時期の人口調査の方法が異なるため、比較的信頼できる統計値を選んで示す。各時期の数値の性格が異なるので、あえて線で結んでいない。

折れ線グラフと棒グラフとでは、相違はあるものの、一八世紀なかばに人口が急増していたことを、見て取ることができる。一八世紀末の中国の人口は、上り坂の途中に位置していた。

一八世紀末の中国の人口は、けっして停滞的ではなかった。人口爆発ともいえそうな急増が清代に始まり、二一世紀まで続く。このような人口爆発が起きたのはなぜなのか。また、一八世紀以前の人口がせいぜい一億という水準に留まっていたのはなぜなのか。

本書では、あらためて中国の人口を、先史時代から人口急増後の一九世紀まで、たどっていく。二〇世紀以降については稿をあらため、巨大な人口を擁することになった中国を、近現代世界史のなかに位置づけることにしたい。

それではさっそく、マルサスが提示した公準に立ち返って、動物としての人間の特質という

起点から、始めよう。

## 中国人口史とは何か

「中国人口史」を掘り下げると大見得を切ったが、その対象はいったい何なのだろうか。

「日本人口史」を横目で見てみると、それは「日本列島に暮らす人々」が対象となっているようだ。海に囲まれた日本の場合、どこまでが日本の歴史の範囲なのか、という問題に、沖縄と北海道などの地域を除いて、あまり自覚的だったとはいえないだろう。

しかし、ことが中国となると、歴史地図を開いていただければ一目瞭然。中国史の範囲は時期によって異なっている。「中国を統一した」とされる王朝の版図を見比べてみただけでも、大きな違いがある。中国人口史の範囲は、このように日本人口史とは異なり、自明ではない。論じる人の責任で、その対象を限定する必要がある。

まず、「中国史」とは、何なのか。

中国の起源をどこに置くかという問いには、『史記』に記された三皇五帝の神話の時代に相当する新石器時代までさかのぼるのか、王朝という政治形態が始まった夏朝が起点となるか、文明の大枠が定まる周代なのか、秦の始皇帝が天下統一を成し遂げた時期なのか、いくつもの答えがあるが、少なくとも数千年の歴史を誇っている。

「中国人口史」の対象となる「中国人」は、どの範囲の人々なのか。「自分は漢族だ」と自任している人々なのか、中華人民共和国の国籍を有するモンゴル人やウイグル人なども含むのか、異なる政治制度のもとにある台湾が入るのか、あるいは海外に展開している華人も加えるのか、いくつもの考え方があるが、世界人口のおよそ五分の一を占めていることに変わりはない。

視点が異なれば、いくつかの「中国人口史」が並立できるが、本書では中国文明が包摂した人口を対象とすることにしたい。なぜなら、文明を対象とすることで、はじめてヒトという動物の「頭数」を調べる意義が生まれるからである。

「文明」という言葉には、語る人によってさまざまな定義が与えられているが、本書では次のように考えたい。ヒト(現生人類、学名 *Homo sapiens sapiens*)は、他の動物とは異なり、群の生息域の枠を越えて、他の群の生息域とのあいだでモノを授受している。ヒトは交易を行う動物である。ヒトの歴史のなかで、ある時期から社会のなかで交易を専門とする人々が現れる。このとき、「文明」が始まる。

ヒト以外の動物は、生息域の生態系の許容範囲を超えて、増え続けることはない。草とウサギとキツネのたとえでは、ウサギが増えると、ウサギを捕食するキツネが増える。そのためにウサギの数は、増え続けられない。ウサギが減って、獲物が得られなくなったキツネが少なく